

大学野球選手におけるイップス発症の実態

-イップス有無、守備位置、チーム内での立場、野球経験年数に着目して-

伊藤太一（横浜国立大学）

1. 目的

本研究の目的は、競技レベルの高い大学野球選手を対象にイップス発症の実態を明らかにするとともに、イップス発症の可能性が高い選手の早期発見に役立てることである。

2. 研究方法

- 1) 対象者: 大学で硬式野球部または準硬式野球部に所属する 166 名に調査を実施し、そのうち有効回答を得られた 160 名 (96. 4%) を分析対象とした。
- 2) 調査時期: 2021 年 11 月下旬から 12 月上旬
- 3) 調査方法: 質問紙調査
①基本項目②投球・送球に関する質問③イップス尺度(内田 2007)「予期不安」、「身体像の歪曲」、「自然体の欠如」、「周囲からの助言」、「他者肯定」の 5 因子 21 項目から構成された尺度を用いた。イップス有無に関して、内田(2007)の研究に用いられている判断基準を参考にした。
- 4) 分析方法: 各因子における項目の合計得点の平均値を従属変数に用い、基本的属性(イップスの有無、守備位置、チーム内での立場、野球経験年数)の各項目を独立変数として、t 検定、一要因分散分析を行った。本研究では有意水準を 5%未満とした。また、分析には HAD 17_102 を使用した。

3. 結果と考察

1) 基本的属性とイップス得点との関係

調査対象者 160 名中、イップス群 53 名 (33. 1%)、非イップス群 107 名 (66. 8%) であった。イップスの有無とイップス得点との関係に対応のない t 検定で比較した結果、5 因子全てにおいて、イップス群が非イップス群に比べ、有意に高いことが示された(表 1)。

表1 イップスの有無とイップス得点との関係

	イップスの有無
予期不安	有>無**
身体像の歪曲	有>無***
自然体の欠如	有>無***
周囲からの助言	有>無***
他者肯定	有>無***
	***p<.001,**p<.01

つまり、イップスを発症する選手の特徴には、「予期不安」、「身体像の歪曲」、「自然体の欠如」、「周囲からの助言」、「他者肯定」の 5 因子が起因している

ことが考えられる。

守備位置とイップス得点との関係を一要因分散分析で比較した結果、「他者肯定」において、捕手、内野手、外野手が投手との間にそれぞれ有意差が認められた。

チーム内での立場とイップス得点との関係を一要因分散分析で比較した結果、有意差は認められなかった。

野球経験年数とイップス得点との関係に対応のない t 検定で比較した結果、「周囲からの助言」以外は長期群が短・中期群に比べて高い数値を示した。つまり、競技歴が長くなるほどイップスを発症する可能性が高いことが推察される。

2) 長期群における基本的属性とイップス得点との関係

中込(2006)は競技歴が長くなるほど、イップスを発症する可能性が高くなると報告している。そこで、本研究での野球経験年数長期群(12 年以上)の 104 名を基本的属性間で比較した。長期群の 104 名中、イップス群が 39 名 (37. 5%)、非イップス群が 65 名 (62. 5%) であった。

長期群におけるイップスの有無とイップス得点との関係に対応のない t 検定で比較した結果、5 因子全てにおいて、イップス群が非イップス群に比べ、有意に高いことが示された。つまり、経験年数が長くなっても、イップスを発症する選手の特徴には、5 因子が起因していることが考えられる。

長期群における守備位置とイップス得点との関係を一要因分散分析で比較した結果、「予期不安」において、投手、内野手、外野手が捕手との間にそれぞれ有意差が認められた。

長期群におけるチーム内での立場とイップス得点との関係を一要因分散分析で比較した結果、有意差は認められなかった。

4. 結論

競技レベルの高い大学野球選手においても、イップス発症の可能性の高い選手は、「予期不安」、「身体像の歪曲」、「自然体の欠如」、「周囲からの助言」および「他者肯定」に起因していると考えられ、競技歴が長いほど、イップスに陥る可能性が高いと考えられる。

<参考文献>

- 1) 内田稔(2007): 野球選手におけるイップス尺度の作成, 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科修士論文, 1-71
- 2) 中込四郎(2006): アスリートの心理臨床, 第 1 版, 109-125

